

同棲生活という世界 『アンナ・カレーニナ』と『或る女』における 同棲生活について

アルベナ・トドロヴァ

0. 作品と同棲生活

本稿では『アンナ・カレーニナ』（1877）及び『或る女』（1919）における同棲生活の分析を行ってみたい。二つの作品の比較研究はさほど多くはないが、そのほとんどは有島武郎の思想や創作におけるトルストイの影響、あるいは主人公たちの造型における共通と相違を探っている。また、『或る女』を論じる際多くの研究者は有島におけるトルストイやイプセン（特に『ヘッダ・ガブラー』）の受容、または『ボヴァリー夫人』などとの類似に言及している¹。本稿ではそういった影響関係ではなく、各作品のプロットの重要な要素である同棲生活がどのような条件のもとで成り立っているか、作品全体においてどのような位置を占めているか、同棲生活は主人公の関係をどのように形成しているのか、同棲生活はなぜ失敗するのかを探ってみたい。

同棲生活について

本稿では男女が結婚していない状態にありながら、互いに対して婚姻相手のような関係を結んで婚外の共同生活を送ることを同棲生活と定義する。具体的に述べると、それは『アンナ・カレーニナ』のアンナとヴロンスキーとの同棲、『或る女』の葉子と倉地との同棲である。各作品においてそれ以外の具体例が見られる場合、それにも言及する。

同棲生活を分析の出発点として扱う意義は、どこにあるだろうか。その一つは、同棲生活はある特定の世界として扱うと、その中の人物の関係が明確に見えることにありと考えられる。それから、同棲生活は結婚生活と対照的な事態として出現しているが、後述するようにそれには必ずしも否定的な意味があるわけではない。恋愛相手と一緒にいることが女主人公の夢、または「目的」として描かれている（アンナはそれを「不可能な至福」（Толстой, 18, 450）として見て、葉子は「倉地と離れては一日でもいられそうにはなかった」（有島, 186）とある）が、同棲生活はその「目的」の達成になる。『アンナ・カレーニナ』でも『或る女』でも同棲生活は結婚への途中の段階であるはずだ。

いずれの作品でも主人公の関係はその次の段階へととは発展しない。そして、その同棲生活の失敗が女主人公のいわゆる「破滅」の直前段階である。

また、同棲生活は共存の一種である以上、その世界は感情や思想のレベルにおいてのみではなく、現実世界のレベルで受容と排除によって境界づけられている領域である。しかし、『アンナ・カレーニナ』と『或る女』の場合、同棲生活は受容と排除のみで成り立っているわけではない。その世界の重要な特徴である不安定性は、排除された過去に対する感情的な未練と執着に由来している。女主人公たちは未練と執着によって、受容と排除の間に引かれる境界線を無効にし、現在（同棲）と過去（前の関係）の間を行き来している。その動きによって、同棲生活によって結ばれているはずの関係が新たに不安定になる。同棲生活は家族のように明確な境界線によって区切られた空間ではないため、同棲生活を築こうとしている主人公はその境界線を常に意識しそれらを保全しようとする努力が必要である。しかし、未練と執着はその保全と逆の方向の働きをしており、現在と過去の境界線を曖昧にしてしまう。その未練と執着は、具体的には離れた相手や家庭に対するものである。

いかに閉ざされた世界のように見えても、同棲生活は必ずしも外界から完全に切り離されたものではない。トドロフは *La vie commune: essai d'anthropologie générale*（トドロフ、1995）の最終章において共存と充足感の関係を追究しており、充足感の中でも二種類を区別している。それは“accomplissement”（自己が直接に体感する充足感）と“reconnaissance”（他者——人間でなくてもいい——によってもたらされる認識）である（Todorov, 162）。“Je-Tu”は共存の世界であるのに対し、充足感は“Je-Cela”という領域の絶頂である。人間はその両方の世界を必要としている、とトドロフは主張している（Todorov, 165）。同棲生活は本来前者のはずである。しかし、同棲生活は未練と執着に妨害されるため、不安定性をはらんだ共存としてしか成立しない。その上、同棲は結婚と違って、社会的にも認められず、不安定な状態である。同棲生活は共存の一種である以上、同棲している相手が互いに充足感だけでなく、認識によっても結ばれていると考えられる。共存生活を送っている人にとってその生活は円満なものであるため、上記の二種類の充足感がなければならない。アンナのカレーニンに対する不満は、そこから来ていると言える。結婚生活において彼女はカレーニンに自分が人間として認められていると実感できず、またカレーニンに許されたことも受け止められない。それはアンナとカレーニンの間の距離が遠すぎて、共有できる空間がとっくに存在していないからであるとも言える。また、『或る女』に関して言えば葉子は恋の「絶頂」に至らないことで充足感を覚えるが、その「絶頂」を相手と共有できない。

I. 『アンナ・カレーナ』における同棲生活

1. 時代背景と作品における結婚観

Freezer が述べているように、帝国時代のロシアでは、正教教会が婚姻に関わる全ての儀式や規制をコントロールしていた。西欧（特にプロテスタント圏）と比べて、ロシアでは結婚は単なる法律上の婚姻関係ではなく、聖なる婚姻としてみなされていた（Freezer, 722）。Freezer が述べているように、“The rigid ecclesiastical control over divorce was, at least initially, most opprobrious to elite(...)”（Freezer, 745）。それは、ピョートル皇帝の社会体制改革の結果として、家庭ではなくて、婚姻関係にある二人が国家の単位として扱われているようになったため、教会は離婚に対して非常に否定的であったからであるという。例えば、1836 年～1860 年の年間平均離婚数は 58 件に過ぎなかった（Freezer, 733）。ただし、Freezer の研究の対象は 1860 年までの時代だが、彼はその結論で離婚に対する否定的な方針がロシア帝国時代全体を通して大きく変化しなかったと主張している。当時のロシアの婚姻関係に関してより詳細な調査が必要であるが、本稿ではこれ以上時代背景の問題は追究しない。

トルストイが『戦争と平和』では「国民の思い」（“мысль народную”）を好んだのに対して、『アンナ・カレーナ』では「家族の思い」（“мысль семейную”）を好んだことは、ソフィア・トルスタヤの日記に記されており（Толстая, т.1, 502）、その一句は広く知られている。アンナ・カレーナ』からは、当時のロシアにおける実際の家族観のみならず、トルストイが家族というものをどのように考えていたのか、家族についてどのような疑問を抱いていたのかがうかがえる。

『アンナ・カレーナ』には、同棲生活の例がいくつかある。本稿で主に扱う第五部から第七部にかけてのアンナとヴロンスキーの同棲生活以外に、例えば第七部のチェチェンスキー公の「第二」の家庭やレーヴィンの兄ニコライとマリアの同棲生活がある。前者については本文中に次のように書かれている。

У князя Чеченского была жена и семья - взрослые пажи дети, и была другая, незаконная семья, от которой тоже были дети. Хотя первая семья тоже была хороша, князь Чеченский чувствовал себя счастливее во второй семье. (Толстой, 19, 307)

後者についてニコライは作品中でレーヴィンに対して次のように言っている。

А эта женщина, (...) - моя подруга жизни, Марья Николаевна. (...) Она все равно что моя жена, все равно. (Толстой, 18, 93)

これらの箇所からすれば、『アンナ・カレーニナ』の世界は同棲生活を完全に否定しているとは断定しがたい、と言ってもよいだろう。先行研究²では作品におけるモラルを論ずる際に、トルストイ自身の宗教観や価値観を取り上げる研究者が多いが、本稿では作品全体において「同棲生活」がどのように位置づけられるかを見てみたいので、トルストイ自身の思想よりも上記のような作品中の箇所が重要であるように思われる。

上記の引用からしても、作品全体を通じて同棲生活自体は必ずしも否定的に描かれているわけではないことがうかがえる。また、冒頭の不幸な家庭への言及だけをとって見ても、結婚が絶対的な価値を有しているように描かれているとはいいがたい。それゆえ、アンナとヴロンスキーの関係が失敗する原因は、二人の生活のあり方にあるのではなくて、その他の何かにあると言えるだろう。

2. アンナとヴロンスキーの同棲生活

2. 1. 同棲生活の成立

『アンナ・カレーニナ』には同棲生活をしているケースがいくつかあるが、そのうち第五部から第七部にかけてのアンナとヴロンスキーの同棲生活を取り上げることにする。二人が作る世界は彼らを軸にして成り立っているが、その他にも何人かの主要人物がいる。それはヴロンスキーとアンナの娘アニー、アンナの兄スティヴァとその妻のドリー、ヴロンスキーの母親、アンナとヴロンスキーの友人や知人である。

アンナとヴロンスキーの関係は同棲生活が始まる以前から成立している。その関係の展開も非常に複雑で興味深いものであるが、本稿ではそのいくつか重要だと思われる箇所のみを取り上げる。

二人の関係におけるアンバランスは、早くも競馬のシーン前後から明確になっている。それは自分の世界と相手の世界に対する二人それぞれの見方が合わないところから、明白になっていく。例えば、ヴロンスキーはアンナとの関係に没頭しているのみではなく、競馬や社交界にも関心を寄せている。

Две страсти эти не мешали одна другой. Напротив, ему нужно было занятие и увлечение, не зависимое от его любви, на котором он освежался и отдыхал от слишком волновавших его впечатлений. (Толстой, 18, 184)

というのは、ヴロンスキーに恋愛から休息する余裕がある領域が必要であり、それは彼の「独立」（независимость）を絶対的に守る性格と関連している。そして、アンナとの関係が悪化していく家庭の中で彼は自分の「男としての独立」（мужская

независимость) (Толстой, 19, 221) だけは譲れないと胸の内で思っている。その領域は常に意識されて表面に現れているものではないが、それはアンナとどうしても共有できない空間である。

アンナにもヴロンスキーとどうしても共有できない世界があるが、それは息子セリョージャに対する母性愛とそこに由来する悲劇である。アンナはドリーの前で次のように打ち明けている。

Я не могу их³ соединить, а это мне одно нужно. А если этого нет, то все равно.
(Толстой, 19, 217)

ヴロンスキーの方では独立が共有できないのに対して、アンナの方では息子に対する依存が共有できないのは興味深い。

実際に同棲生活の成立を可能にしたのは、ヴロンスキーが察知した「危機」(кризис) (Толстой, 18, 198) の到来である。それに続いた第四部を通してのカレーニンも含めた三角関係が陥った“временное горестное затруднение” (Толстой, 18, 372)、カレーニンがアンナとヴロンスキーを許したこと、ヴロンスキーの自殺未遂、第四部の最後に起こった離婚に関するすれ違いなどはすべて平常な次元のものではなく、いずれも非常事態であった。また、Karpushina はアンナのヴロンスキーとの同棲を“absence of a family” (Karpushina, 66) と定義している。

2. 2. 屈辱と哀れみ——同棲生活の意味

アンナとヴロンスキーの同棲に対して「正しくない」という単語は二回使われている。それはドリーの観察(“неправильная семья” 「正しくない家庭」) (Толстой, 19, 193) 及びトヴェルスカヤ夫人のアンナに対する非難(“И она мне сказала, что она меня знать не хочет, пока мое положение будет неправильно.”) (Толстой, 19, 213) である。しかし、二人の同棲が失敗する原因はそこだけにあるわけではない。一つの可能な解釈は Morson の説である。Morson によると、“Anna teaches herself to misperceive reality” (Morson, 117)。そのように誤解された現実において、アンナのカレーニンを故意に理解しない態度は、ヴロンスキーとの関係にも表れてくる (Morson, 103)。しかし、後述するように、アンナがヴロンスキーに求める相互認識が二人の関係を破壊させるのである。

ヴロンスキーは早くからアンナの社会的地位を配慮して離婚を上記の「危機」の最適解決法としてみなしている。そうしない限り、アンナの立場が非常に困難になることを知っているからである。しかし、その配慮に対してアンナは次のように答えている。

Если она⁴ моя, то я чувствую себя так высоко, так твердо, что ничто не может для меня быть унижительным. Я горда своим положением, потому что... горда тем... горда...」 (Толстой, 18, 334)

屈辱を感じるために、屈辱を与える者と屈辱の対象になる者は同一世界にいないといけない。そして、屈辱を与える者はその対象になる者に対して、権力を付与するのである。ヴロンスキーの愛情を受けることによって、アンナは自分が屈辱の対象になりうる世界全体から排除される。しかし、ある時点からアンナとヴロンスキーは愛情の絆によってではなく、哀れみによって結ばれていることが分かる。

(...)теперь, (...) ему казалось, что он не чувствовал любви к ней, он знал, что связь его с ней не может быть разорвана. (Толстой, 18, 378)

このシーンはアンナの妊娠の後半にあたるが、その時点でヴロンスキーは既に恋愛の最も幸せな時期が終わっていることを意識している。ヴロンスキーの愛情に義理と哀れみが加わっていくにつれ、それらはアンナとの間の距離を大きくする働きをしている。自殺を覚悟する直前、アンナは哀れみを次のように考えている。

Ей можно было жалеть о себе, но не ему о ней. (Толстой, 19, 282)

アンナにはヴロンスキーの愛情以外に、彼女の愛情に対する彼の認識が必要である。それは、ヴロンスキーとアンナが同じ世界を共有していることの証拠だからである。しかし、哀れみは屈辱の場合と同様に、哀れむ者と哀れみの対象である者が同一世界にいることを必要とする。アンナとヴロンスキーは既に同じ世界を共有しているが、ヴロンスキーがアンナを哀れむという行為はアンナにヴロンスキーを感情のレベルでコントロールする権力を与える反面、彼女にとって愛情を妨げるものである。なぜなら、アンナは哀れみというものは強い者が弱いものに対して現わす感情だと考えているからである。そのため、既に自分の立場が弱いことを意識しているアンナはその弱さを思い出される哀れみを否定してしまう。アンナが哀れみを拒否していることを察知しているのは、スティヴァである。アンナの家へレーヴィンと一緒に連れていく途中、彼女の立場の困難さをアピールしようとして彼は次のように言っている。

она не хочет, чтобы к ней ездили из милости (Толстой, 19, 272)

スティヴァに妹の内面世界が理解できるとすれば、アンナは単に周囲からの哀れみを拒否しているのみならず、ヴロンスキーの「哀れみ」をも拒否しているというようにこの一句を解釈することもできるだろう。

アンナはまわりの人々に対して非常に敏感な存在として描かれているが、自分をめぐる権力関係に対して特に感覚が鋭い。ヴロンスキーから屈辱を受けていると感じた後、彼女は自殺の決心を実行に移すのである。

Она не могла понять теперь, как она могла унизиться до того, чтобы пробыть целый день с ним в его доме. (Толстой, 19, 332)

それは自分の独立を守るヴロンスキーの様子をアンナが愛情の欠如と誤解した結果である、という解釈も可能ではあるが、次の一節を使って分析してみよう。

Для того чтобы предпринять что-нибудь в семейной жизни, необходимы или совершенный раздор между супругами, или любовное согласие. Когда же отношения супругов неопределенны и нет ни того, ни другого, никакое дело не может быть предпринято.] (Толстой, 19, 318)

同棲生活が始まってからアンナはヴロンスキーと自分を明確に別々の世界の存在として初めて見るのは、“с ним в его доме”を意識し、それを屈辱として感じた時である。その屈辱感が「何か」の行為をする不吉なきっかけにもなるが、屈辱が機能しているのはアンナとヴロンスキーが同一世界を共有しているからである。そしてアンナには、自分が明らかに権力（ヴロンスキーが自分の独立を確保しようとする言動）を与えられているという感覚がある。

Но главная забота ее все-таки была она сама - она сама, насколько она дорога Вронскому, насколько она может заменить для него все, что он оставил. Вронский ценил это, сделавшееся единственной целью ее жизни, желание не только нравиться, но служить ему, но вместе с тем и тяготился теми любовными сетями, которыми она старалась опутать его.(Толстой, 19, 220)

アンナにとってヴロンスキー以外の世界は意味を持たない。トドロフ論を引用すると、アンナは“Je-Cela”の領域を完全に失っているが、人間が“Je-Cela”の世界も必要としている以上、アンナは認識も充足感もヴロンスキーに求めはじめる。しかし、充足感是他者によって持たされるものではないので、ヴロンスキーはアンナに充足感を与えることが

できない。アンナとヴロンスキーの同棲生活における重要なすれ違いの一つは、ここにある。

Ⅱ. 『或る女』における同棲生活

1. 時代背景と作品における結婚観

『或る女』の世界は明治期の世界であるとともに、キリスト教の影響を強く受けている世界でもあると言える。それぞれの特徴を見てみよう。

まず、明治期の結婚に関しては湯沢が結婚に関する法律や規制が数回に渡り変更されていることを指摘し、次のように述べている。

（略）結婚以外の男女関係すなわち婚外関係が盛んにもたれたのは当然だった。（湯沢、116）

また、明治維新後法律上では一夫一妻以外の婚姻、あるいは同棲が認められていないにもかかわらず、妾を正妻と妾が同居するケースも多く見られる（湯沢、114）。

作品中の結婚の中には、幸福な家庭と呼べる事例がほとんど見られない。葉子の両親の関係は父親の不倫によって危機に陥るし、葉子自身は木部と家庭を築くこともできないし、倉地でさえいかにも幸福そうな家庭を見捨てて葉子との関係を結ぶ。葉子にとって木部との結婚は自分を束縛しようとしている環境に対する反逆行為であり、木部自身は「母に対する勝利の分捕り品として、（略）葉子一人のものとなった」（有島、18）。そして、葉子の木村との結婚は自分の意志によるものではなく、亡母への約束と親族の意志によるものである。洋行前の葉子は全ての希望を失ったように描かれている。洋行中の船の中で葉子は「結婚と云うものが一人の女に取って、どれほど生活という実際問題と結び付き、女がどれ程その束縛の下に悩んでいるか」（有島、109）と考えている。そのためとも考えられるが、葉子は可能な結婚相手として木村との関係を断たないことに決める（有島、287）。いかに結婚に対して否定的な考え方の葉子でも「実際問題」の解決法として結婚以外の手段はないことを意識している。つまり、葉子にとって結婚生活は相互認識及び充足感が可能である世界には見えないと言ってもよいだろう。

2. 同棲の成立

『或る女』において葉子と倉地の同棲生活は後編の27章の中から全部で20章（第22章から第42章まで）を占めている。それは後編の重要な構成要素をなしているが、厳密に言うとそれは途中（第29章）から物理的な同棲ではなくなる。葉子が「美人屋敷」へ

妹たちを迎えた後、倉地が別居することが決まる。それは、「(略) 朝から晩まで一緒に寝起きをするよりは、離れた所に住んでいて、気の向いた時に会う方がどれ程二人の間の戯れの心を満足させるか知れないのを、二人は暫らくの間の言葉通りの同棲の結果として認めていた。」(有島、321)。葉子の目から見た同棲生活の理想像はアンナとヴロンスキーの結婚と離婚の間の曖昧な領域ではなく、二人だけの空間であるが、そういった空間が成立しても長く続かない。

山田は語り手と女主人公の関係を詳細に研究しているが、葉子と倉地が離れていくことを語り手の意志によるものだと述べている(山田、200)。山田の解釈によると、主人公二人の関係の失敗は語り手が最初から設定して、葉子の自由な意志に左右されずに発展していくものとして分析できる(山田、198-202)。

また、山田は倉地との関係を葉子自身の選択ではないと主張している。それは、葉子を「操っている」暗い力が葉子自身の外にあると考えているからである(山田、204)。しかし、葉子は倉地と結ばれる以前から木村の妻にならないことを決めており(有島、146)、倉地との関係はその決心の実現への道として解釈することも可能だろう。

葉子の激しい感情の動きをヒステリーで説明する論がよく見られる(本多、280)が、それは有島自身『或る女のグリンプス』の改作の際エリスの『性心理学の研究』(1905) 影響を認めているからでもある。しかし、作品中に取り上げている葉子の恋愛関係は、全て平常ではない状況のもとで始まっている。木部との関係は親佐に対する反逆をきっかけにし、木村との婚約は親佐の危篤の際に成立し、倉地との関係は洋行中の船で始まる。その中で最も幸福なのは倉地との関係であるが、その関係を考える際キーワードになるのは「絶頂」である。同棲が始まって間もなく「二人の幸福はどこに絶頂があるのかわからなかった。二人だけで世界は完全だった。」(有島、291)とあるが、倉地との別居が決まったとき「葉子はしかしなんといても自分が望みうる幸福の絶頂に近い所にいた。倉地を喜ばせる事が自分を喜ばせる事であり、自分を喜ばせる事が倉地を喜ばせる事である、そうした作為のない調和は葉子の心をしとやかに快活にした。」(有島、341)。また、倉地との隔たりが大きくなるに連れて、葉子には「自分の恋には絶頂があつてはならない。」(有島、372)と感じられてくる。「絶頂」は何を意味しているだろうか。それは 達成すべき目的を持たないで、常に動いているところでしか充足感を持たない葉子の心を象徴していると言えよう。葉子は恋愛自体を以てではなく、恋愛が持たせてくれる揺動を以て充足感を覚える。

3. 未練と執着。失敗する同棲生活

Ⅱ．3．では、同棲生活における未練と執着と同棲の失敗の関連性を探ってみたい。そのために二つの問いについて考えてみたい。すなわち、①葉子はなぜ定子と同居しないのか。定子は倉地との同棲においてどのような役割を果たしているのか、②葉子と倉地の最後はなぜこうなるのか。

葉子の内面世界の動きは、非常に激しいものである。それは定子に対する感情に関しても言える。葉子は定子に対して未練と愛情を持っているが、倉地の催促（有島、320）にもかかわらず、定子を新しい家へ迎えようとししない。妹たちに対する態度も、兄弟愛というよりは、主人が女中に対するような厳しいものである。「一家の主」（有島、371）になった葉子は、倉地にそう求められていなくても、彼との関係をより強くするために自分の過去の全てのものを捨てようとする。しかし、定子のことが頻繁に（有島、289、290、310、338 等）思い出させていることからすれば、過去への未練は新しい生活を不安定にしている。そして、倉地との同棲が終わる直前、葉子には次のように思われる。

俺れは妻とは家庭を持とう。然しお前とは恋を持とう。そう云って涙ぐんでくれるかも知れない。若しそんな場面が起こり得たら葉子はどれ程嬉しいだろう。葉子はその瞬間に、生れ代って、正しい生活が開けてくるのと思った。（有島、455）

いかにも主役たらんとする葉子は自分を「恋」の相手として据え、「理想像」の関係において自分を脇役の位置へ置く。そういった三角関係は当然ながら成立し得ないが、「恋」の相手が自分の正しい生活であると夢想する葉子の内面が興味深い。また、その図式の中に妹たちと定子が登場しないというのは、葉子に倉地だけとの世界、第三者のいる世界が必要であるからだと解釈できる。しかし、雨の中のけんかで終わる二人の同棲は、最初からそのような第三者のいない世界を築く試みであっただろう。

Ⅲ．まとめ

以上両作品における同棲生活の世界を見てきた。『アンナ・カレーニナ』の場合同棲生活はあらゆる「危機」によって可能になり、屈辱と哀れみの独得なメカニズムによって破壊されていく。またそれに対して、『或る女』では「絶頂」のダイナミックスが重要な役割を果たしている。いずれの作品においても過去への未練と執着及び相手に求める認識が同棲生活の失敗、そして関係自体の失敗への道になる。『或る女』の前半において「屈辱」は葉子の夢想の中で倉地と結ばれることの前兆として解釈もできるが、両作品における屈辱についてまた別に機会でも論じることにする。

注

¹小坂晋、柳富子を参照。

²Бабаев, Эйхенбаум を参照。

³ヴロンスキーへの愛情とセリョージャへの母性愛。

⁴ヴロンスキーの愛情のこと。

参考文献

有島武郎『或る女』新潮文庫、東京、1993

小坂晋「『或る女』と『アンナ・カレニナ』——比較対比研究序説」『岩手大学教育学部研究年報』第26巻、盛岡、1966

本多秋五『『白樺』派の作家と作品』未来社、1968

柳富子『トルストイと日本』早稲田大学出版部、東京、1998

山田俊治『有島武郎〈作家〉の生成』小沢書店、東京、1998

湯沢雍彦『明治の結婚明治の離婚 家庭内ジェンダーの原点』角川選書、2005

Freezer, Gregory L. “Bringing Order to the Russian Family: Marriage and Divorce in Imperial Russia 1760-1860.” *The Journal of Modern History*, Vol. 62, No 4, 1990.

Karpushina, Olga. *The Idea of the Family in Tolstoy's Anna Karenina: The Moral Hierarchy of Families in Studies in Slavic Cultures*, Pittsburgh, Issue II, 2001.

Morson, Gary Saul. *Anna Karenina in Our Time : Seeing It More Wisely*. Yale University Press, 2007.

Todorov, Tzvetan. *La vie commune: essai d'anthropologie générale*. Editions de Seuil, 1995.

Бабаев, Э. Г. Из истории русского романа XIX века. Пушкин, Герцен, Толстой. Москва, 1984.

Толстая, С.А. *Дневники*. В 2-х томах, Москва, 1978.

Толстой, Л.Н. *Полное собрание сочинений*. тт. 18, 19. Ленинград, 1934-1939.

Эйхенбаум, Б.М. Лев Толстой. Семидесятые годы. Ленинград 1974.

Worlds of Cohabitation

On the Problem of Cohabitation in *Anna Karenina* and *A Certain Woman*

Todorova Albena

This research aims at analyzing cohabitation in *Anna Karenina* (1877) and *A Certain Woman* (1919). Cohabitation is viewed as a specific space shared by the protagonists and sometimes their family members or relatives. The methodology of this research is to apply the idea of Todorov (Todorov, 1995) about accomplishment and recognition in order to attempt a more clear view on the way cohabitation exists and the relationship that the cohabitants are having.

In the case of *Anna Karenina* the world of the cohabitation is brought into existence by several “crises” and its end is caused by humiliation and pity. In *A Certain Woman* the attachment to the life before cohabitation and the impossibility to build up a world for only the two protagonists proves the cause for the failure of their relationship.